関西・大阪21世紀協会ホームページ
インターネット番組「御食国 関西」好評アップ中

御食国（みけつくに） 関西 瀬戸内が育んだ大阪の食文化 ～なにわ鯛絵巻～（24分）

総合監修：佐々木洋三（関西・大阪21世紀協会 専務理事）　制作著作：オプテージ、関西・大阪21世紀協会

大地（ジオ）の遺産 瀬戸内海

朝廷に魚介類を献上することが許された「御食国」。関西の食文化を掘り起こす御食国シリーズの第6弾は、日本人の食や風習にゆかりの深い高級魚「真鯛」をテーマに、瀬戸内が果たした役割にスポットを当てます。

大阪湾南岸一帯は「ちぬ（茅渟）の海」と呼ばれました。茅渟は和泉国あたりの古称で、茅（かや）の生えた野を意味し、江戸時代の国学者本居宣長の『古事記伝』には、クロダイが「ちぬの海」の名産であったことから、魚名に「チヌ」がついたと記しています。また、「なにわ」の語源は、たくさんの魚（な）が漁れる庭（にわ）を意味するとも言われました。

司馬遼太郎は『大阪の原形』という短編の中で、古代大阪を「四天王寺が造営（593年）されたころに、もし『大阪市民』の先祖がいたとすれば、それは恐らく漁民だった。古代の淀川河口、大阪湾一円には多くの漁民が住み、古代のことばで『あま（海人）』と呼ばれた。（中略）古代の大阪湾は、漁場として偉大だった。古代から近世にいたるまで、沿岸漁業の技術の蓄積と進歩を生んだ海である。とくに河内（大阪市の郊外）や大和（奈良県）に所在した宮廷のために、海人は魚や貝をとり、塩をつくった。このため淡路島をふくめ、宮廷の直轄の漁師ということになっていた。住吉大社の祭神は海と海底をつかさどる神であり、かれら漁師たちが、自分たちの神であるとして崇敬していた」。

「百魚の王」と真鯛が崇められたのはその呼び名からも明らかで、春先、産卵に乗っ込む鯛を「桜鯛（春）」、産卵後の痩せた鯛を「麦わら鯛（夏）」、越冬前の脂の乗ったものを裏旬の「もみじ鯛（秋）」と呼び、市場価値が変わりました。

真鯛は潮流の速い岩場を好むため、江戸時代から身を傷めない「一本釣り」が重んじられてきました。そこで欠かせないのが「テグス」と呼ばれる釣り糸。番組ではテグスサンという蛾の繭から作ったこの透明な糸のルーツを探ります。もともとは大阪・道修町の薬問屋が瀬戸内海航路で中国から取り寄せ、漢方薬を縛るために使っていたものでした。やがて、鳴門の漁師たちはテグスを直接中国から仕入れて、専門に販売する「テグス商廻船」をはじめました。この行商船はテグスや釣り針といった漁具（ハード）だけでなく、瀬戸内海各所の一本釣りの漁法やさまざまな文化・情報（ソフト）の媒介役となったのです。

昭和初期に使われていたテグス（左）と昭和47年まで活躍していた堂浦のテグス行商船（瀬戸内歴史民俗資料館）

番組では、当地で最後のテグス行商船を知る釣具店の店主や、テグス行商船の実物が展示されている瀬戸内海歴史民俗資料館（香川県高松市）を訪ね、当時の様子を取材しています。さらに、鳴門海峡で35年間にわたり鯛漁をしている漁師の伝統的な真鯛の一本釣り漁に同行。鯛漁に適した天候や餌、仕掛けの説明に加え、1～ 2kgほどある真鯛を次々に釣り上げ、「鳴門鯛」のブランド名で出荷されるまでを紹介しています。

そんな大阪が、さらなる発展を遂げることができたのは、大地（ジオ）の遺産、瀬戸内海によるところが大きいといえます。まだ、動力がなかった時代は、潮汐による潮流が下関ー大阪間の船の往来を支えてきました。これにより古くは遣唐使や遣隋使の時代から、大阪は日本の玄関口として大陸の文化を吸収してきました。

このように瀬戸内海に面した大阪には、生きたままの魚が運ばれ、活魚料理が発展。記録に残されたところでは、元禄時代、佐賀関の漁師達が、釣り上げたマダイを生簀に生かしたまま大阪まで運び、雑魚場（魚市場）に卸したというから驚きます。また、その模様を唄った民謡も今に伝承されています。そして、大正時代には客の目前で魚を料理してみせる割烹料理が大阪に生まれ、グルメな船場の旦那衆を虜にしました。

黒門市場から国立文楽劇場に納められる「にらみ鯛」が初春の風物詩として有名です。商人の街・船場では、かつて立春から八十八夜にかけて「お鯛さん」を得意先や隣近所にふるまう習慣があり、その身を刺身にしたり、頭や骨はあら炊きや潮汁、残りは煮付けにしたり、「喰いきり」の精神で残らず味わいました。番組では、そうした大阪の伝統的な鯛料理を現代感覚で継承する料理人の技も紹介。

最後は、瀬戸内のグローバル性に詳しい奥野卓司氏（関西学院大学社会学部名誉教授）に、アビという鳥を活用した「アビ漁」を引き合いに鯛を通して瀬戸内海が大阪の発展に貢献したことや、現在の国際化の中で大阪・関西に求められている役割について言及していただきました。

奥野卓司氏

菜種油を使い7時間も火をいれて作った「小鯛の野崎焼き」。骨まで丸ごと食べられる（懐石料理 雲鶴〔大阪市北区〕）

ナビゲーター
泉 希衣子

関西・大阪21世紀協会は、動画「御食国 関西」をウェブサイトに掲載しています。

YouTube 御食国 関西 で検索　または、関西・大阪21世紀協会ウェブサイト「関西の魅力」にアップ中です。
http://www.osaka21.or.jp/movie/

イベント報告

関西・大阪21世紀協会は、**「助成と顕彰」、「関西・大阪ブランドの発展と発信」、「伝統の進化と創造」**の3つを事業の柱としています。その中から、2019年度下半期に実施された事業のいくつかをご報告いたします。

1講座500円・ワークショップの見本市 ワークショップフェスティバル DOORS 13th

2019年7月27日～30日、8月3日～4日
（大阪市立芸術創造館、旭区民センター、大阪府立江之子島文化芸術創造センター、クレオ大阪南）
主催：IWF実行委員会（関西・大阪21世紀協会、アートサポート共同事業体）

「誰もが気軽に参加できること」をモットーとしたワークショップ（体験講座）の見本市。古典芸能から最新アートまで、「ちょっと興味がある」「一度やってみたかった」というニーズに応え、今回で第13回を迎えました。大阪市内の4会場で101講座が開催され、小学生から60代以上まで、のべ1,201名が参加。ワークショップ技術の養成を目的とした講師対象の「ワークショップ勉強会」も5年目を迎え、講師同士の交流機会としても好評でした。

また、関連企画として、今回も西宮市と西宮ドアーズ実行委員会の主催で「西宮ドアーズ」（同年8月24日～25日）を開催。西宮市民会館において、マジック入門や狂言体験など32講座が開講されました。

「一5才に!あなたに似合う美人眉メイクレッスン」の様子

「ワークショップ勉強会」の様子

交流サロン 21cafe 水惑星地球の行方を探る モホール計画・人類未踏のマントルへの挑戦

巽 好幸氏（神戸大学海洋底探査センター センター長）　2019年9月12日／中之島センタービル

モホール計画とは、海底のモホ面（地殻とマントルの境界）に穴（ホール）をあけ、マントルの岩石を採取するプロジェクト。1957年にアメリカで提唱され、大陸移動説や温暖期と寒冷期を繰り返す地球の環境変動などが解明されました。現在は、世界で唯一マントルを掘ることができる日本の地球深部探査船「ちきゅう」を使った国際プロジェクトになり、遠い将来、地球が極度な寒冷期に入るのではないかという予想の検証などが行われています。

巽氏は、「1970年大阪万博で科学技術の進歩の象徴として月の石が展示されたように、2025年大阪・関西万博ではマントルの石を展示したい。その採取が間に合わなくても、日本でモホール計画が進んでいることを多くの人に知ってもらいたい」と述べました。

巽 好幸氏

交流サロン 21cafe East meets West ! 中之島をミュージアム群島（アイランド）に育てよう

岩佐倫太郎氏（美術評論家）　2019年11月7日／中之島センタービル

2021年度に予定される大阪中之島美術館の開館は、中之島全体が「博物館島」（ミュージアム・アイランド）として整備される好機です。岩佐氏は、大阪市立東洋陶磁美術館（中国・韓国の陶磁）や中之島香雪美術館（日本の伝統美術）、国立国際美術館（戦後の現代美術）に加えて、近代絵画を扱う新しい美術館ができることで、中之島が東西の美術と歴史を俯瞰した日本を代表する文化発信の島になると指摘。

また、幕末に日本から流出した浮世絵が影響を与えてヨーロッパの印象派絵画を生み出したことを力説。そこからゴッホ、ゴーギャンなどのポスト印象派やマティスらのフォービスムの登場、そして20世紀に入ってエコール・ド・パリと呼ばれるユトリロ、モディリアーニ、佐伯祐三ら大阪中之島美術館の収蔵作品へとつながる美術史を、画像を示しながら解説しました。

岩佐倫太郎氏

当代の人気者が繰り出す新春の伝統行事 今宮戎神社十日戎「宝恵駕（ほえかご）行列」

2020年1月10日／道頓堀（とんぼりリバーウォーク）～今宮戎神社

今宮戎神社「十日戎」の奉納行事として、大阪府無形民俗文化財に指定されている宝恵駕行列。「とんぼりリバーウォーク」での出発式の後、芸妓代表の友紀子さんを先頭に、歌舞伎俳優の中村鴈治郎さんや日本舞踊・山村流六世宗家の山村友五郎さん、OSK日本歌劇団の桐生麻耶さん、NHK連続テレビ小説『スカーレット』に出演中の福田麻由子さんらが続き、沿道の歓声をあびながら2時間にわたりミナミの商店街を練り歩きました。

宝恵駕行列は、元禄時代に花街の集客や商売繁盛を祈願してはじまり、現在は地元商店会や経済界などの協力で、その伝統が受け継がれています。関西・大阪21世紀協会　上方芸能運営委員会は、このような大阪が誇る上方文化が2025年大阪・関西万博の時にも重要なコンテンツとなるよう、支援を続けていきます。

芸妓代表の友紀子さん

ミナミの商店街に繰り出す宝恵駕行列